

機関番号：12613

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520462

研究課題名（和文）日本語教育の効果を高める言語不安の制御方法とそれをふまえた教授スキル訓練の方法

研究課題名（英文）Increasing the effectiveness of teaching Japanese using Language Anxiety controlling methods, and the training of teaching skills based on those methods.

研究代表者

西谷 まり (NISHITANI MARI)

一橋大学・国際教育センター・准教授

研究者番号：80281004

研究成果の概要（和文）：言語学習の効果に影響を及ぼす要因の1つとして、言語不安が挙げられている。ただし、これまでの研究には、正の効果を指摘するものと、負の影響を指摘するものの両方がある。本研究は、この見解の相違を解消するために、言語不安そのものではなく、言語不安の解釈に着目した。そして、言語不安の原因になる「失敗」をポジティブに捉えさせるため、「失敗から学ぶ」学習方略を指導し、その効果を検証した。

研究成果の概要（英文）：One of the factors which determine how effectively languages are learned is language anxiety. However, research so far has focused on either its positive or negative effects. In an attempt at a synthesis of the two views, this paper will not focus on language anxiety per se, but rather on how it is interpreted. Therefore, in order to cast one of the causes of language anxiety, namely failure, in a positive manner, the strategy of learning from failure was taught, and its effect tested.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：日本語教育

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：日本語教育, 言語不安, 不安の解釈, 学習方略使用, e-learning

1. 研究開始当初の背景

言語学習に関する研究では、その学習効果に影響を及ぼす要因の1つとして、「言語不安＝外国語を学習する際にもつ不安やそれによって引き起こされる緊張」が挙げられている。そして、多くの研究は、言語不安と学習者のパフォーマンスとの間には負の相関関係があるとしている。一方、不安とパフォーマンスの間には正の関係も負の関係もあ

るとの見方、不安を *debilitative anxiety* と *facilitative anxiety* に分類し、*facilitative anxiety* は学習者の競争心を高め、よく勉強させるという見方もある認知領域については、言語分析などの研究の蓄積があるが、情意領域である動機づけ、態度、自尊心、不安、信念などは客観的な数量化や明確な分類が困難なせいもあり、相対的に研究が遅れている。その中でも、動機づけや言語不安と学習成果

との関係に関する調査は行われているが、それらの結果を踏まえた教師の対応行動の提言はあるものの、実際にそれが教育効果に結びつくかどうかの実証的研究は我々の研究以外にほとんど見られない。また、言語不安の研究では、言語不安そのものが阻害的にはたらくか、促進的にはたらくかという点に着目しているが、スポーツ心理学の分野では、不安をどう解釈するかという点に着目した研究が行われている。マーティン・ハガーはパフォーマンスを弱める効果をもつものは選手の不安の強さそのものではなく、不安の解釈あるいは向きであると述べている。スポーツ心理学における指摘をふまえると、不安の解釈を変化させる働きかけがより重要であると考えられる。

3. 研究の方法

(1) 不安の高低よりも不安の解釈が教育効果に強く影響しているという仮説を立て、言語不安と動機づけが失敗に対する認識を介して学習方略の使用にどのような影響を及ぼしているのかを調査する。

(2) 調査を基に指導モデルを構築する。

(3) モデルを基礎に e-learning 教材を作成する。

(4) 開発した教材の評価を行う。

(5) 指導法を提案する。

2. 研究の目的

言語不安と関連の情意的要因の調査と、情意的特性に効果的に働きかける指導モデルを作成する。さらに、モデルに基づいた e-learning 教材を作成し、教材の評価を行い、教授スキルの訓練方法を考察する。

4. 研究成果

(1) 言語不安、不安や失敗の解釈、動機づけ、学習方略の関係

学習方略指導のための仮説モデルを作成するために、言語不安、不安の解釈、動機づけの間の相互の和の相関関係と、それらと学習方略使用の和の相関関係を調べた。調査は、中国の3つの大学で日本語を学習する学生（日本語学科の1年生から4年生）を対象として、2009年2月から3月にかけて実施した。対象者は152名であった。内容は、日本語学習における言語不安、不安の解釈、動機づけ、学習方略使用に関するものであり、全て中国語

に翻訳した。

言語不安と相関が見られたのは、「失敗を不安に原因帰属」(0.70)であった。「失敗の効用を認識」は、学習方略のすべての因子と相関が高く、「失敗から学ぶ」が0.62と最も高い値を示している。「失敗を不安に原因帰属」は、言語不安のほかに、「外的動機づけ」(0.32)との相関が見られる。「内的動機づけ」は、「失敗の効用を認識」(0.49)と相関が見られたほか、すべての方略との相関が高い。この関係を図に表したものが図1である。

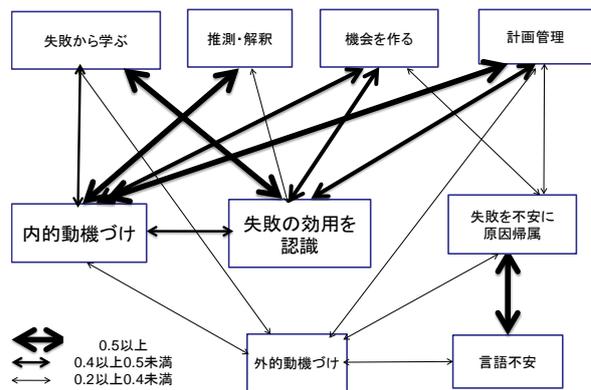


図1 言語不安、不安や失敗の解釈、動機づけ、学習方略の関係

(2) モデルの構築と教材開発

ここまでの結果に基づいて、不安の解釈を変化させる働きかけがより重要であると考えた。ただし、不安という概念は、それ自体がネガティブな解釈を前提にしている。不安を無理にポジティブに解釈させようとしてもうまくいかない可能性がある。そこで、不安の原因と想定される失敗（間違いを起こすこと）の効用を認識させるような働きかけを考えることが重要であると考えた。そして、そのような働きかけを情意的に行うだけでなく、「このように学習すればよい」という学習方略指導を加えれば、パフォーマンス向上にもつながり、成功体験が不安の促進的解釈につながるという仮説をたてた（図2）。

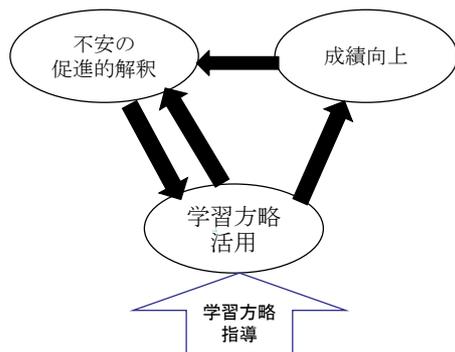


図2 学習方略活用を促すモデル

(3) e-learning 教材の開発

日本語教育のCAIソフトやe-learning教材は、文字、文法、発音、聴解、読解、作文などの教材が作られており、データベースや辞書の作成も行われている。外国人日本語学習者は日本語のe-learning教材に対して一定の評価を与えている。この種の教材では、言語技能の向上に焦点を当てているため、古典的なプログラム学習の理論に基づき、自分のペースで、好きな時に好きなだけ学習でき、個別の即時フィードバックが得られることがe-learning化することのメリットと考えられる。

e-learning学習における動機づけ、学習方略使用について調査したものは、日本語教育分野には無いが、英語教育分野には見られる⁽¹²⁾⁽¹³⁾。そこでは、e-learning学習を有効に行うために学習方略活用のトレーニングが重要であるという知見を得ているが、e-learning教材において学習方略の活用を促す働きかけを行った研究は見られない。さらに、言語不安やその解釈を変える指導をe-learning化した教材は、いずれの言語教育の分野でも見られない。

本研究では、ある特定の内容に関するe-learning教材を開発することが目的ではなく、指導法を定式化し、e-learning化することに主眼がある。よって、異なる複数の内容で使える指導法として確立するために、2つの教材を開発した。

共通点は日本人との会話の中で失敗をして、対応を誤るとトラブルになる場面をとりあげたことである。教材1では待遇表現を取り上げ、教材2では待遇表現以外の場面をとりあげ、教材1で学んだ学習方略に汎用性があり、違う内容の教材でも活用できるかどうか

かの確認を行う。

一方、両者の相違点は、教材1では待遇表現の基礎知識が身につけていない学習者にも対応するため、言語形式の基礎練習のモジュールを含んでいるが、教材2は既に修得している基礎知識の活用場面のみを取り上げ、「失敗から学ぶ」方略指導に焦点を絞っている点である。なお、教材2で扱う題材は、若者がよく使っており日常生活の中で聞き覚えた日本語の誤用表現を年配者に対して使ってしまった場合などである。

(4) 評価実験

教材の効果を検証するために、2011年1月に実験を実施した。実験参加者は国立大学の日本語力上級レベルの留学生53名である。図3に示す通り、まず、待遇表現に関する事前テストと、不安・不安の解釈および学習方略使用に関する事前調査の結果から、失敗から学ぶ方略指導を行う実験群と失敗から学ぶ方略指導のない統制群に分けた。実験群(26名)と統制群(27名)で有意な差が見られたものはないため、2群は等質であると判断した。

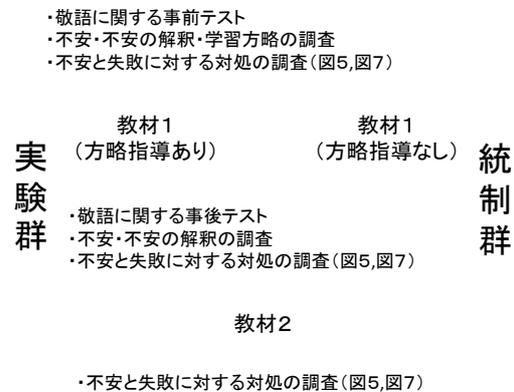


図3 実験計画

教材1の前後でとった言語不安と不安の解釈に関する調査について対応のあるt検定を行ったところ、言語不安については変化がなかったが、失敗の効用認識については、(実験群 $t = -3.23$, $p < .01$, 統制群 $t = -1.08$, n. s.) となっており、実験群のみで有意に失敗の効用認識が高まっている。

教材1の学習前、学習後、教材2の学習後の3回行った「不安と失敗に対する対処」調査の変化を見てみる。まず、以下の質問で自

分がとる行動の1位（一番やりそうだと思うこと）と2位（次にやりそうだと思うこと）を5つの選択肢の中から選ばせた。5つの選択肢についてリスクをとるかどうかで分類したものを図4に記す。A, Bはリスクをとらない行動で, D, Eはリスクをとる行動, Cはその中間に位置づけることができる。実験群では明らかに, リスクをとる選択肢を選ぶ者が教材1学習後に増加し, 教材2でもその傾向が持続している。統制群では, 教材2終了後にリスクをとる傾向が高くなっている（表1）。

日本語の新しい表現を覚えました。ちょうど使えそうな場面に遭遇しましたが, その場面に適当かどうか自信がありません。そんな時, あなたはどのようにしますか。

A. 自信がない表現は絶対に使わない
B. 他の表現があればそちらを使う リスク回避

C. 相手と自分の関係によっては使ってみる

D. なるべく間違えないような対処を考えて使ってみる
E. 日本語が上手になるために, 多少のリスクがあっても使ってみる リスクをとる

図4 リスクをとる対応

表1 リスクをとる対応の変化

	事前	教材1学習後	教材2学習後
実験群	6名	14名	14名
統制群	8名	6名	11名

1位を2点, 2位を1点, 不選択を0点として, t検定で実験群と統制群を比較し, 有意差がでたものはE「日本語が上手になるために, 多少のリスクがあっても使ってみる」である。教材1学習後 ($t=2.74, p<.01$), 教材2学習後 ($t=3.03, p<.01$) とともに実験群の値が大きい。さらに対応のある t 検定を行ったところ, 実験群では, 教材1学習終了後D「なるべく間違えないような対処を考えて使ってみる」 ($t=-1.57, p<.10$), E「日本語が上手になるために, 多少のリスクがあっても使ってみる」 ($t=-2.60, p<.05$) の値が上昇している。実験群の失敗の効用認識低群は教材1学習終了後にEを選択する者が増えている ($t=-2.83, p<.05$)。統制群についても教材2終了後にDの値が有意に上昇している ($t=-2.66, p<.01$)。

次に失敗の対処については, 図5の質問で1位, 2位を選ばせた。いつ問題を解決するのかに着目して分類したものを記す。A, Bはあとで解決を図ろうとするもので, D, E, 失敗から学ぶ方略指導のある実験群は, 教材1学習教材終了後にその場で解決する方法を選ぶ学習者が増加しているが, 統制群にはあまり変化がない（表2）。

日本語を間違えたかもしれない, と思ったときにあなたはどのようにしますか。

A あとで辞書やネットで調べる.
B あとで日本人の友人に聞いてみる. あとで解決

C ゆっくりはつきりと言い直してみる. 言い直し

D その場で相手に表現に問題があるかどうか聞く.
E その場で携帯などで調べる.
F 他の日本語に言い換えてみる. その場で解決

図5 失敗の対処

表2 その場で解決する対応の変化

	事前	教材1学習後	教材2学習後
実験群	14名	21名	22名
統制群	16名	14名	16名

失敗の対処について実験群と統制群を t 検定で比較し, 有意差がでたものをあげる。教材1学習終了後, D「その場で相手に, 表現に問題があるかどうか聞く」は実験群の値が高い ($t=2.98, p<.01$)。教材2学習後, E「その場で携帯などで調べる」は実験群の値が高い ($t=2.07, p<.05$)。変化について対応のある t 検定を行ったところ, 実験群ではDは教材1学習後に ($t=-4.10, p<.01$), Eは教材2に値が高くなっている ($t=-2.27, p<.05$)。実験群の不安高群では, 教材1学習終了後にDを選択する者が増えている ($t=-1.84, p<.10$)。実験群の促進低 (失敗の効用認識低) 群は教材1学習終了後にDを選択する者が増え ($t=-2.59, p<.05$), 教材2学習後はEを選択する者も増えている ($t=-2.11, p<.10$)。

待遇表現に関する事前・事後テストについて対応のある t 検定を行ったところ, 事後

テストの点数は両群ともに上昇しており（実験群 $t=-3.14$, $p < .01$, 統制群 $t=-3.42$, $p < .01$ ）, 教材1の学習効果が認められた。しかし, 両群の比較では有意差は認められなかった。

(5) 指導法の提案

失敗の効用を認識させるような働きかけを情意的に行うだけでなく, 学習方略指導を加えることによって, リスクをとる行動と失敗への対処が可能になることが明らかになった。実験結果は開発した e-learning 教材の有効性を十分に示していると言えよう。

より重要なことは, 失敗の効用認識が低い学習者に対しても指導の効果が高いことが明らかになったことである。言語不安そのものを変化させることは難しいが, 失敗の効用認識にアプローチすることで学習者の意識を変化させることができることが明らかになった。失敗から学ぶ方略を指導すると, 不安があってもリスクを恐れずに使ってみようと考え, 失敗した場合にはその場で間違いについて確認し, 人間関係を悪くする可能性を最小限に抑える方略を使用できるようになると考えることができる。

実験群のほうが統制群より成績が良いということは実証されなかったため, 失敗の効用を認識させるような働きかけを行うことが, 成績向上にもつながり, 成功体験が不安の促進的解釈につながるという仮説全体を検証することはできなかったが, 言語不安に着目した教授スキルは失敗から学ぶことを学習者に指導することが有効であることが示唆された。

今後の課題は, 同じ指導方法が異なる日本語レベルの学習者に対しても有効であるかどうかを検証することである。今回の実験は日本語上級学習者が対象であったが, 初級中級レベルの学習者に対する効果の検証が必要である。また, 通常授業において, ある程度の期間にわたって指導を行うことによって, より効果的な指導法を開発していきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① Nishitani Mari, Matsuda Toshiki” The Relationship between Language Anxiety, Interpretation of Anxiety, Intrinsic Motivation and the use of Learning Strategies” US-China Education Review, Vol. 8, No.9, 2011 (in press) 査読有
- ② Nishitani Mari, Matsuda Toshiki ” Consideration of the Interaction of Languages Anxiety and the Learning Strategy” , Proceeding of E-Learn 2009, pp.1853-1860. 査読有
- ③ 西谷まり 「動機づけ・外国語不安の捉え方と学習方—ベトナムと中国の学習者の比較—」一橋大学留学生センター紀要第12号, pp. 15-25, 一橋大学留学生センター, 2009. 査読無
- ④ 西谷まり 「控制外语学习者语言焦虑的反馈策略—考察网络教学中使用的教材」外国語文学論叢, pp. 152-161, 中国出版公司, 新華社書店発行, 2008. 査読無

[学会発表] (計5件)

- ① 西谷まり 「言語不安とその捉え方に着目した学習方略使用促進のための指導方略の効果」日本教育工学会研究報告会 (2010年12月18日 大分大学)
- ② 西谷まり 「日本語学習者の学習方略使用を促すEラーニング教材の開発」日本教育工学会研究報告会 (2009年12月19日 於京都外国語大学)
- ③ 西谷まり ” A Consideration of the Interaction of Languages Anxiety and the Learning Strategy” E-Learn 2009--World Conference, Vancouver, 2009. 10. 29
- ④ 西谷まり 「日本語学習において言語不安の捉え方が学習方略使用に与える影響」東北師範大学赴日国留学生予備学校創立30周年記念日本語教育国際シンポジウム (2009年8月16日 中国吉林省長春市 東北師範大学赴日国留学生予備学校)
- ⑤ 西谷まり 「外国語不安と学習方略」日本教育工学会研究報告会 (2008年12月20日いわき明星大学大)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西谷 まり (NISHITANI MARI)

一橋大学・国際教育センター・准教授

研究者番号: 80281004